

これからのことを…… (4)

●「方丈記」の世界



毎日お世話に野菜生産者の方々・写真2016年9月

感染症に豪雨……

コロナ禍の渦中、加えて九州地方では短時間で大量の雨をもたらす雲、線状降水帯という現象で、川が氾濫し、山が崩れ、多くの方々が犠牲に。ここ数年、類似した天候で被害が起こっています。被災された方々は生きて来た中で初めてのことで。悲しみ、疲労の中で片づけをされている方々の映像が目に焼き付いています。これを書いている今は東海地方へと。海水温が1度上がると空気を含むことが出来る水蒸気量が6,7パーセント増加することから大量の雨に、豪雨と。(7月8日時点)

かつて京都で

鴨長明(1155年～1216年)は大火、竜巻、戦乱、飢饉、大地震、疫病を目の当たりにし、それを「方丈記」に著しました。

八幡まるごと館だより

2020年7月14日/128号

<発行>八幡まるごと館/八幡市男山松里12-20
(TEL&FAX) 075-983-3664(9時~17時)
(E-MAIL) yawata@marugotokan.net
ホームページは <http://marugotokan.net/>
又は、八幡まるごと館で検索して下さい



八幡まるごと館は街行く人のだれもが自由に立ち寄れる“地域サロン”です。休館日は毎週火曜日全日と土・日午後です。

平安時代の末期から鎌倉時代前期へと転換した激動期。丁度、まるごと館での八幡の歴史講座と同じ時代くらい、今から800年余り前のお話です。

『ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつむすびて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖(すま)かた、また



下鴨神社の森

かくのごとし』との冒頭部分は良く知られています。でも、なんで今「方丈記」を?と読

まれた方々は思われるでしょう。

4月から緊急事態宣言が出され、11年間ずっと、館でやってきたことが出来なくなって、どうしたらいいか迷う日々。何かこの機会に少しでも揺るがない

ものをつかみたいと思うようになりました。4月、5月、6月のまるごと館たよりは、筆者が右往左往してきた記録ですが、「これからのことを…」と題してずっと書いてきました。今回もですが。こんな4月、若松英輔さん(随筆家)の言葉からヒントを得ました。

「方丈記」を学ぶことで

今と深くつながること。自分を取り戻すための場所、方法を持つこと。コロナ禍だからと巣ごもりするだけでなく、社会が揺らぐ時自分自身に揺るがないものを「方丈記」の叡智から、と。

鴨長明は…

父親は下鴨神社の正禰直惣官で、長明はその次男として生まれた。18歳の時に父が亡くなるまで、静寂さに包まれた糺の森や小川が瀬音をたてながら流れていく風景の中で恵まれて育った。

そこで川を巡る美しい思い出が培われたのは納得できる。色々と事情があったようで、それ以降30歳位までは祖母の家に。神官にはなれなかったけれど、新古今集の編纂に関わる宮中の和歌所の職員に。優れた歌人で随筆家であった。

『石川や瀬見の小川の清ければ月もながれをたづねてぞ澄む』は新古今和歌集に。

50歳春に出家大原に、54歳の時伏見区日野の山中に4畳半か5畳半の庵(方丈庵)を作り、そこで「方丈記」を執筆し、1212年には完成したと言われる。この庵は下鴨神社の摂社・河合神社に復元されている。(右下写真)

当時何が…

長明が生まれて1年後に京都市内を戦場とする保元の乱、4年後に平治の乱が起こる。



鴨長明(ネットより)

23歳で大火を経験。直線距離にすると2,5kmで平安京の中枢部を焼き尽くし、都の3分の1を失う程

。26歳で治承の辻風という竜巻を。『かの地獄の業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおぼゆる』とその暴風の凄まじさを。建っていた家々は大小全て壊れ、当時の中御門京極から六条辺りまで(3km)吹いた。

同年6月平清盛による福原(今の神戸)への突然の遷都。400年近く都は京都であったがために、これには全ての人々が不安を。

長明は福原まで出向き、その土地形状から様子等をつぶさに記している。そして、結局、その年の11月に還都した。

長明ははっきりと

解説者によると福原遷都は愚挙としかいようがなかった。巨大な浪費とむなしい成果。そこで、ちょっと長いですが、『伝へ聞く、いにしへの賢き御世には、あわれみをもって、国を治め給ふ。すなはち、殿に茅ふきても、軒をだにととのへず。煙のもしきを見給ふ時は、かぎりある貢物をさへゆるされき。これ、民をめぐみ、世をたすけ給ふによりてなり。今の世のありさま、昔になぞらへて知りぬべし』(訳・伝え聞くことには、いにしへの賢帝の御代には、慈愛をもって

国をお治めになったという。

すなわち宮殿に茅を葺いても節約

のために先端の軒を整えず、煙が立つのがとぼしいのを裏面へ続きます



瀬見の小川



河合神社方丈庵復元より

＜6月にこんなことをしました＞

オカリナひまわり



8日(写真の日)4月はずっと3人の時が、6月になると10人をこえ、22日には13人も来られました。まだ先が読めない状況です。オカリナを

皆で吹くだけでも気持ちが変わってきます。練習曲の「諸人ごぞりて」のテンポが中々あいませんが、今年がだめでも来年のクリスマスコンサートにでも上達したところをお客様に聞いていただけたらと思っています。参加者の皆さんのお元気そうなお顔をみて、やっぱり集まれるのほいほいなあと感じたのは筆者だけではないと。来年3月町内での演奏依頼が、

絵手紙講習会



17日 森本玲子さんに教えていただいて丸7年に。あっという間でした。描くことが何十年振りという多くの参加者と共に歩んでいただきました。じっとお家で過ごされていた方もこの日久し



振りの講習会参加に。皆様方が時間をかけて、描くのも、関係も楽しく素敵に作って来

理科の実験32



19日「ペットボトルの中に雲を作る」がテーマ。炭酸系のボトルを各自が用意

、講師の木下章司さんと宮地さんにお世話になりました。やかんでお湯を沸かした時の状態を絵にかくように言われ、何事かと思いがらのスタートでした。湯気の様子などまじまじと見たことがありませんが、ペットボトルにキャップをつけ、ポンプペ



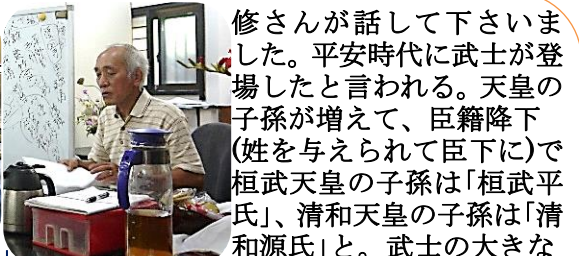
ットボトルがへこまない程空気を入れ、キャップを外すとびっくりする程のボン

という音と共に、ボトルの中に白いものが、ボトルの中の温かい空気が冷やされて出来たには雲です。

八幡の歴史20



25日 2月に講習会があつてから3ヶ月お休みにしていましたから、心配していましたが、10人も。この日は中世源氏と八幡宮がテーマで出口



修さんが話して下さいました。平安時代に武士が登場したと言われる。天皇の子孫が増えて、臣籍降下(姓を与えられて臣下に)で桓武天皇の子孫は「桓武平氏」、清和天皇の子孫は「清和源氏」と。武士の大きなかたまりは源平の動きを中心に作られていったのかなあと勝手に推測してしまいます。武士は明治になると存在しないけれど、政府の中枢を担って

ていた。お話を源氏が石清水八幡宮を如何に崇敬していたかで、源頼朝の八幡宮参詣から始まりました。計5回来ていて、1195年4月15日長男頼家と一緒に家族6人を思つてか、

鎌倉から6本の松を持参、植樹したと伝えられる。が、昭和22年に落雷で出火。今のそれは昭和30年に。「源頼朝手植松」の碑が駐車場、放生川近くに。

八幡まるごと館 7月・8月の予定

休館 7月31日(金)午後から
8月11日(火)～8月18日(火)

＜パソコン教室＞ 毎週月曜日10時～12時です
7月6日(月)10時～12時 講師吉田恒夫さん 参加費300円(コーヒーつき)
7月13日、20日、27日、8月3日、24日、31日パソコンを持って来て下さい。

＜オカリナクラブ ひまわり＞ 楽しめる時こ
7月6日(月)13時～ 参加費100円 13日、20日、27日 練習日は月曜日だけに
8月は3日、24日、31日のみです。

＜絵手紙講習会＞
7月8日(水)13時30分～ 講師 森本玲子さん参加費 400円(コーヒーつき)
8月は例年お休みしていますので、次回は9月9日(水)です

＜楽しい理科の実験 N033＞ 高気圧と低気圧について
7月17日(金)13時30分～ 講師木下章司さん 参加費300円(コーヒーつき)

＜歴史を学ぶ 新八幡の歴史 N021＞
7月23日(木)13時30分～ 講師出口修さん 参加費100円 月1回です

＜折り紙教室 第11回＞ どうぞお楽しみに。
8月27日(木)13時30分～(初めの日程と1日変わりました) 講師 出口宏子さん 参加費材料代は100円 持ち物 カッターをお忘れなく

表ページからの続きです ご覧になった時は、必要な租税までもお許しになったのだ。これすべて民をいたわり、世を救済なさろうとなさったからである。今の世のありさまは、昔の世と比べて、その違いがはっきりとわかるだろう)と長明ははっきりと。解説によると福原遷都に平清盛は瀬戸内海航路を使つての外国との交易を考えていたという。民の声、生活と随分かけ離れている。今にも通じるかと。

声ならぬ声を聴く耳

27歳の時、飢饉で稲や麦などの五穀が実らない、刈り取りも収穫も出来ないことが2年間も続く。様々なお祈りが行われても効果はない。供給源は地方からだが、送られて来ないために結局はお金より粟が貴重に。飢饉の原因は天候の不順だけでなく、うち続く戦乱で田畑は荒れ果てて収穫どころではなかった。全てが疲弊していた。

長明は書く。

『乞食、路のほとりに多く
憂い悲しむ声、耳に満てり』

鴨長明の「方丈記」はほとんど自分の足で実態を見て歩いて書かれたもの。遷都のあった年からは天候は異常続きだったそうです。極端な少雨で早魃、日照りは次の年も続き、とんでもない飢饉へ。その中で長明は見るべきものを見て、あげられない声も聴いている。その所がこの「方丈記」の醍醐味のひとつではないかと思われま

＜あんなこと・こんなこと＞

*「方丈記」(ちくま学芸文庫、浅見和彦さん訳・解説を参考に。訳者の方は「はじめに」で「揺れ動く現代社会にあって、鴨長明の言葉と行動は今、貴重な指針ともなっている」と述べておられる。たった40ページに満たない原文でしたが、時代背景がつかめない筆者には中々大変な挑戦でした。肝心な所がまだ書いていないのと訳者の方が解説でとても興味深いことを書いておられ、次回もあきらめずに2回目の挑戦です。拙い文で申し訳ないですが、よろしくお願ひします。(うえたに じゅんこ)